



Vision

日本生理学会の将来に思いをはせて

京都府立医科大学大学院医学研究科細胞生理学

丸 中 良 典

日本生理学会雑誌 VISION に執筆させて頂く機会を与えて頂きました。本年の札幌大会が終了し、栗原敏前理事長(会長)より理事長(会長)職を引き継がせて頂きましたので、日本生理学会の将来への思いを述べさせて頂きますとともに、自らが生理学研究に身を投じた経緯を含め生理学研究の楽しみに関しても一言述べさせて頂きたく存じます。

私が申し上げるまでもなく、生理学研究の神髄は個々の研究者の自由な発想の元に学問大系が構築されて来たことにあると存じます。日本生理学会はこの生理学研究の神髄を脈々と受け継いでおり、また次世代の研究者へと伝える役目を担っていると考えております。振り返れば、私自身、京都府立医科大学の学部学生時代に生理学講義を受け、医学研究分野において分子レベルから個体レベル(Whole body)での機能をこれほど美しく体系付けている学問があるのかと感激したことを昨日のこのように覚えております。このような感激を受けたのは私1人ではないと存じます。生理学という学問大系は非常に巾広い基盤を有しており、かつ奥深いものです。私にとってはこの生理学大系の基盤の広さこそが非常に興味深いものであり、学部学生時代から今に至るまでその魅力に取り付かれて研究に邁進して参りました。一方で、巾広い基盤を持つが故に、「生理学とは何か?」という問いに一言で表現し得る説得力ある答えが見出しにくい点もあるかと存じます。生理学が有する学問大系としての魅力と一方でその魅力自身が生理学の学問としてのイメージを不明確にしてい

るという面もあると感じています。しかしながら、敢えて誤解を受けることを恐れず生理学を一言で語るなら、「生理学とはあらゆる面において自由な学問である」ということです。研究の神髄は、研究の流行を追うことではなく、新たな研究分野を開拓するオリジナリティー溢れる研究を行なうことであり、そのためには研究における「開拓精神」を持っていなければならないことは明白です。一切の制約を持たない自由さがなければ、研究における「開拓精神」を産み出すことはできません。これは、今までの自らの研究生活での実体験に起因するものです。1990年にカナダのトロント大学において自らの研究室を開設して以来、多くの方々とともに研究を遂行して参りました。常々自らに言い聞かせてきたことは、自らの殻の中に若い研究者を閉じ込めてはいけないということです。さもなければ、指導者を越える研究者が育たず、研究の質は今後低下して行くということになりかねません。もちろん、これは生理学研究に限ったことではありませんが、大いに自由度を持った学問である生理学こそがその先頭に立ち、このことを実践することで、多くの若い人達を生理学研究に引きつけ、若くて優秀な研究者の育成につながるかと確信しています。この点でも日本生理学会が果たす役割は大きいと存じます。

生理学研究の醍醐味は、生命現象を機能面から捉え、その計測結果から生命現象の制御機構を体系づけ、さらには制御物質(分子)の存在を予測(予言)することであり、物理学でいえばある種の理論物理学的予測に相当する研究分野を包含して

いる点ではないかと思っています。また、生理学研究における特徴の一つとして、時間を基軸にして生命現象制御機構の概念構築を行ってきたことにあると存じます。「連続した時間軸を基軸に生命現象をみる」、これこそが生理学研究の醍醐味ではないでしょうか？何と魅力的なことではないでしょうか！

このような議論はそれとして、では日本生理学会が学会として如何に魅力的であるか、今後さらに魅力的な学会にすべく如何なる努力が必要かという点に関して私なりの考えを述べさせていただきます。1)大会および地方会での発表のあり方と講演内容、2)学会運営の透明性・平等性、3)競争的資金運営に関する意見、4)生理学教育、に関してかと存じます。以上の点に関して、先輩諸氏が常々弛みなく尽力されてきたことは周知のことですが、敢えて再度述べさせて頂こうと存じます。なお、栗原敏前理事長が理事長職を務められた4年間の日本生理学会運営上の改革に関しては、本年の日本生理学雑誌 (Vol. 78, No. 1, 2016) VISION に掲載されていますので、是非一読して頂きたく存じます。

1) 大会および地方会での発表のあり方と講演内容：当然の事ですが、大会および地方会での研究成果発表の場があり、研究成果発表の折に建設的な批評が得られることが最も重要なことです。大会では、大会長の先生(方)がその折々の大会の運営方針を決め、また集會委員会とも相談しながら、特徴ある大会を開催するために種々の創意工夫をされています。ご存知の方も多いとは思いますが、大会と地方会が果たすべき役割分担に関しましては、IUPS2009 京都大会開催準備を進めるにあたり議論されております。シンポジウムでの発表は原則英語(教育関係やある種の他学会連携シンポジウムは別として)で行なうとなっております(質疑応答は日本語でも可)。最近の多くの大会では口頭発表は基本的にシンポジウムのみとなっています。従いまして、大会では、一般的に若手研究者に口頭発表の機会が与えられることが少なくなっているというのが現状ではないでしょうか。一方、地方会の役割としては、特に若手研

究者育成という面があると存じます。地方会では、若手教員、大学院生、学部学生の方々による発表に対してシニアーな研究者が建設的な意味での質疑を行なうことにより、若手研究者を育成するという共通認識があると存じます。さらには、若手研究者が大勢の聴衆の前で質疑を行なうということもいい経験になり、若手研究者の飛躍の場になると考えております。現在でも地方会の合同開催も時折行なわれておりますが、地方会の合同開催により研究者のさらなる密な交流が行なわれていくことを切望しています。

2) 学会運営の透明性・平等性：学会が如何に運営されているかを全会員に透明性を持って伝えること、かつ学会が如何に全会員に対して平等性を持って運営されているかを会員に分かり易い形で伝えられるように弛みない努力をすべきだと考えております。特に、学会において運営における平等性とは何か？平等性に関しての思いは、会員一人ひとりにおいて違いはあると思います。平等性の基盤は、自らの意見を表明できる場があることだと確信しています。各種委員会がその重要な場ではないでしょうか？日本生理学会は学会の規模にしては委員会の数が多いのではないかという指摘もあるやと存じますが、委員会活動を通じて日本生理学会のあり方への意見を述べる機会が多く、多くの会員に保証されているというメリットもありますので、この点に関しましてはまた会員の皆様からのご意見を伺いたく存じます。

3) 競争的資金運営に関する意見：日本学術振興会・科研費などの競争的資金のあり方について意見交換の場かつ日本学術振興会などへの意見具申を実施する団体として学会は重要な役割を担っています。最近発足しました日本版 NIH と言われる AMED ですが、米国型と言われるものの中身が日本版に翻訳された時には米国で実施されている中身とはかなり違ったものになっていると感じております。米国には、NIH の研究費以外に、NSF (National Science Foundation) の研究費もあることは皆様ご存知だと思います。米国では NIH と NSF のバランスを意識した運営が行なわれていることを今一度考えてみることも必要だと感じて

おります。自由な発想を持った生理学的ユニークな基礎研究基盤こそが今後の研究費のあり方への提言に重要な役割を担うと確信しています。科研費における基盤研究の充実についても今一度考える時期かと存じます。

4) 生理学教育：生理学教育実践法・教授法を共有する場としての生理学エデュケーター制度が発足しております。教育委員会・生理学エデュケーター認定制度委員会において今後のあり方・認定制度に関して常に検討が重ねられています。また、国外からも講師を招いて、シンポジウムも含め、積極的に生理学教育に関する講演会を開催しています。本制度は、生理学教育の水準を上げるとともに、会員が「生理学エデュケーター」として認定を受けることにより、生理学教育を担う

大学等のポスト応募の際にもポジティブな評価を受けることとなると存じます。日本生理学会として「生理学エデュケーター」認定制度をさらに多くの方々に知って頂くべく広報活動を強化しようと考えています。生理学研究・教育に携わるあるいはこれから携わろうとしている方々が日本生理学会員になるメリットの大きな柱の一つとして生理学エデュケーター制度がさらに広く知られることを切に願っています。

以上のことは、あくまでも私個人としての考えですので、会員の皆様より種々のご意見を賜うことができれば幸いです。今後の日本生理学会運営に生かし、日本生理学会の更なる発展、会員皆様の教育研究面での発展につながる様に努力して参りますので、何卒宜しくお願い致します。